

草書
行書

喪乱帖

王羲之 東晋時代・四世紀

教科書 16 ページ 宮内庁三の丸尚蔵館蔵

釈文

羲之頓首。喪乱之極、
先墓再離荼毒。追
惟酷甚、号慕摧絶、
痛貫心肝。痛当奈何。
奈何。雖即脩復。未獲
奔馳。哀毒益深。奈何
奈何。臨紙感哽。不知
何言。羲之頓首頓首。

書き下し文

羲之頓首。喪乱の極み、先墓再び荼毒に離
る。追惟酷甚だしく、号慕摧絶し、痛み心肝
を貫く。痛み当に奈何すべき奈何すべき。即
ち脩復すと雖も、未だ奔馳するを獲ず。哀毒
益ます深し。奈何せん奈何せん。紙に臨んで
感哽し、何を言わんかを知らず。羲之頓首頓
首。

大意

(王)羲之頓首。争乱が極まり、先祖の墓はまたひどい目にありました。これ进行うとたま
らなくつらく、号泣して心くだけ、痛みは心を貫きます。この痛みをどうすればいいので
しょう。すぐに修復したとはいえ、まだ駆けつけることもできません。哀しみはますます
す深まります。どうすればいいのでしょうか。手紙を書きながらむせび泣き、何といえばい
いのか分かりません。羲之頓首頓首。

